〔研究論文〕

房総における土器片錘に関する一考察

―貝塚遺跡出土の土器片錘の在り方について

石　橋　一　恵

Ⅰ　はじめに

縄文時代文化の研究は、土器論、土器編年論が先行するかたちで始められたが、近年、低湿地や貝塚など、情報量の多い遺跡が調査されるにつれ、土器以外の資料によってもその文化の一端を知ることができるようになった。

これにくわえ、関連諸学問からもさかんにアプローチがなされ、なかでも自然科学の分野からのそれは積極的であり、大きな成果をあげている。

現在、これらの成果をふまえ、改めて縄文時代文化を巨視的な視野でとらえ、自然環境を含め、当時の生活文化を復元しようとする試みが各地でなされるようになった。

縄文時代は狩猟採集経済であり、生活用具のなかにも、食料獲得を目的に作られた道具が多い。これらのなかには、石や獣の骨や角で作られたものの他に、植物を利用したものも多く含まれる。しかし植物性の道具はその性質上、現在遺跡から検出されることは希有である。

このような植物性遺物のなかに、漁撈活動に深く関わったと思われる「漁網」があげられる。これに類するものの出土例としては1975年に愛媛県船ケ谷遺跡より出土しているもののみで、「漁網」の存在は、石錘や土錘、土器片錘、貝塚より出土する魚骨などによって消極的に裏づけされている。

本稿では、土器片錘を漁網錘と仮定し、房総という限られた地域内での土器片錘の出土量、貝塚より出土する魚骨を考えあわせ、当時の土器片錘の在り方をさぐってゆきたい。

なお、ここで論を展開するにあたって、少なくても縄掛けのための切込みを2ケ所以上有し整形がなされているものを土器片錘とし、魚骨とのかねあいで、貝塚遺跡出土のもののみに限定した。

Ⅱ　土錘・土器片錘研究史

縄文時代の漁撈史の研究はE・モースが貝類学者であったこともてつだい、大森貝塚の発掘時から始められた。網漁法の存在についても1911年岸上鎌吉が貝塚遺跡から出土したマイワシ、カタクチイワシ、マアジなどの小魚の遺存骨から網の存在を推測し、おそらく存在したで

あろう網の種類として扠手網、刺網、曳網をあげている。こうして比較的早い時期から網漁法の存在は"あったであろう"と思われていたが、遺物が出土しないことであくまでも推論に留まっていた。このような推論の論拠となったものが遺跡から出土する土錘や石錘である。

直良信夫は縄文時代早期の貝塚である横須賀市平坂上貝塚よりマイワシの背椎骨を多く発見し、この時代から網漁法が存在していたことを指摘した。そして、漁網についても、『土錘、石錘、浮子などの存在から間接的に網の存在を考想していた程度』としていながら、マイワシを捕獲した当時の網としては抄網のみがあったのではないかと推測している。また、土錘や石錘についての考え方も『漁網に必要な附属物ではあるが、必ずしも網そのものの使用に作られたもののみであるとみてはならない』とし、釣針用の錘の可能性を例にあげている。

このように土錘の位置づけは、漁撈用具の二次的な遺物として認められつつも、その母体となるべき漁網の出土例がないこと、土錘じたいの出土状況に大きな特徴的なものを持たなかったことが災いしてその詳しい研究は行われなかった。

土錘や石錘を積極的に漁撈具としてとらえ、それによって「網」や網漁法を解明しようとしたのが渡辺誠である。土錘や土器片錘、石錘の広がりを全国的にとらえ、地域的な分布、時期的な伝播、形態的分類、遺跡の立地などで、網漁業の在り方をとらえようとした。そして、遺物の出土状況や分布状況から、網漁業を中期阿玉台式期（Ⅰ期）とそれ以後（Ⅱ期）に分けられるとし、Ⅰ期は広い地域で漁網錘がみられるものの漁場も安定せず、捕獲された魚にも集中を欠くとし、その特徴をⅡ期は東関東の阿玉台文化圏に遺跡、遺物の集中がみられること、捕獲の対象も内湾性魚類に集中するようになったことと指摘した。そして漁網錘の形も、土器片錘から、切目石錘や有溝土錘に変化しながら、関東地方から西日本や東北地方にその分布範囲が広がったことをのべている。またⅡ期における網漁法として、地引網の可能性をあげ、100g以上の大型の石錘については編み具の錘であるとしている。

渡辺のこの研究以後、全国的な視野にたっての土錘・土器片錘に関しての研究は行われていない。また、渡辺も一定地域内での土器片錘や土錘の、くわしい分析や網漁法にはふれていない。

関東地方に限っても、個々の遺跡の重量、土器片の所属時期などのデータは出されているものの、一定地域内でのデータの集積や分析はなされていないのが、現在、土錘・土器片錘の研究のおかれている状況であろう。

Ⅲ　房総における土器片錘を出土する貝塚遺跡について

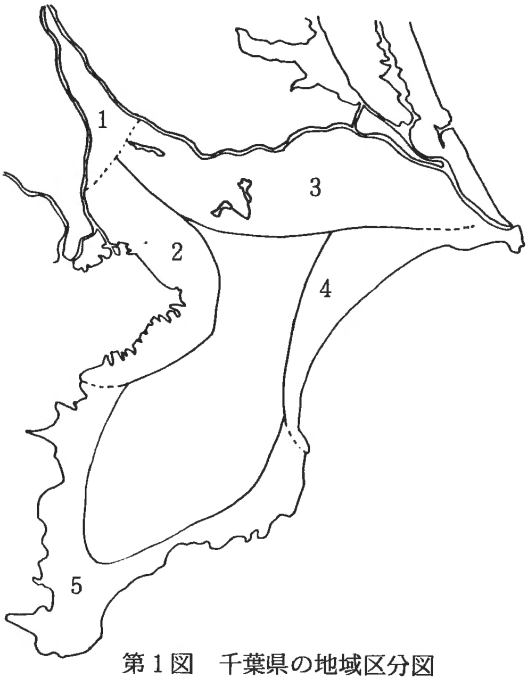
関東地方では、縄文時代の土錘といえば、土器片を再利用した「土器片錘」が主流となる。使用される土器片は、早期夏島式の土器片を利用したものから、後期安行式土器片を使用したものまであげられるが、中・後期の土器片を利用したものが圧倒的に多い。

房総においても、中期から後期にかけて、遺跡の増加にともない、阿玉台式期や、加曽利E式期の土器片を使った土器片錘が多くなる。

現在、千葉県では467ケ所の貝塚が確認されており、これらの貝塚のうち土器片錘を出土する遺跡数は54ケ所を数える。そして、銛や釣針、ヤスなどを出土する遺跡数が12ケ所前後であるのと比較すると約4倍の数になる。

土器片錘の出土する貝塚の形成時期は、中・後期に集中し、使用されている土器片は、五領ケ台式期から加曽利B式期にわたる。

縄文時代中・後期は海進によって形成された地形や自然が、海退によって少しづつさま変わりしてゆく過程にある。この時期の房総半島を自然条件や、地理・地形的条件から分けるといくつかに区分されるが、さらに、土器片錘を出土する貝塚という条件を加えると、1)奥東京湾地域、2)東京湾東岸地域、3)利根川下流域、4)九十九里地域、5)南房総地域の5つが想定される。以下、これらの地域別に土器片錘の出土状況を述べることにする（第1図）。



第1図　千葉県の地域区分図

1)　奥東京湾地域

現在の野田市、流山市、松戸市にあたる。縄文海進期であった前期には、湾奥まで入り込んでいた海水も、中・後期になるにしたがっての海退や砂洲の形成などで汽水化が進んだ地域である。土器片錘を出土する貝塚は、中期加曽利E式期から後期堀之内式期に形成されたものに集中する。この時期はまだ汽水化の影響は進んでおらず、ハマグリやアサリなど砂底性の貝を主体とする貝塚が多い。捕獲された魚類は、スズキ、クロダイ、ボラ、コチなど、沿岸性、砂泥性の魚を中心に、カレイ、ヒガンフグ、サメ、エイなど20種類あまりである。外洋性の魚はマダイがみられるものの大型の回游魚は少ない。

松戸市貝の花貝塚

縄文時代中期から晩期にかけて形成された貝塚。魚類は19種同定されているが、出土時期によってかなりのばらつきがみられる。うちわけは、加曽利E式期4種、堀之内式期10種、加曽利B式期12種、安行Ⅰ・Ⅱ式期4種、安行Ⅲa～C式期3種である。出土量から、この貝塚における漁撈活動は後期にピークをむかえることがわかる。

土器片錘は51個出土しており、このうち後期の土器片を利用したものは3片あり、他は、加曽利E式土器を利用したものが主体を占める。

2) 東京湾東岸地域

現在の市川市、船橋市、習志野市、千葉市、市原市、袖ケ浦町にあたる。縄文時代の大型貝塚が集中する地域でもある。真間川、海老川、都川、村田川などの河口に海退とともに砂州が発達し、内湾部はそれによって汽水化が進んだ地域である。土器片錘を出土する貝塚は奥東京湾の貝塚とほぼ同じ時期のものであるが、出土する土器片錘の量は300個以上を数える貝塚も数ケ所みられる。貝塚を形成する貝類は、ハマグリやアサリなどの砂底性のものに混じり、マガキなど泥底性のものが含まれる貝塚が多い。捕獲対象となる魚は、スズキ、クロダイ、ボラ、コチなど沿岸性、砂泥性の魚を中心に、エイ、ヒガンフグなど内湾性の魚と、カタクチイワシ、マイワシ、マグロなどの外洋性の回游魚があげられる。また、イルカ、ウミガメ等の海洋性動物も多くみられるようになる。

船橋市高根木戸貝塚

縄文時代中期に形成された貝塚。この貝塚から出土する魚骨は、クロダイ、スズキ、ヘダイの3種類のみであり、出土量も少ない。

土器片錘は678個出土した。そのほとんどが加曽利E式土器を利用して作られたものである。土器片錘の他にも漁撈具として、石錘54個、刺突具3個が出土した。

千葉市加曽利貝塚

縄文時代中・後期に貝塚形式が積極的になされた貝塚。魚類は19種同定されている。各時期のうちわけは、加曽利EⅠ・Ⅱ式、阿玉台式期5種、堀之内式期6種、加曽利B式期12種である。いずれの時期もクロダイが出土量の50%近くを占めるが、加曽利B式期には、外洋性のメカジキ、ソウダカツオなどが出土し、かわって、砂泥性のコチがみられなくなる。

土器片錘は630個出土した。この大半が、加曽利E式土器を利用したもので、後期の土器を利用したものは30個程度にすぎない。その他の漁撈具としては刺突具、釣針が出土しているが、中期と後期では数量的には大きな差はない。

3) 利根川下流域

縄文時代早期末から前期前半にかけて、現利根川流域は、縄文海進によって印旛沼や手賀沼を含め、太平洋に東面して開口する古鬼怒湾を形成していた。その後の海退にともない、古鬼怒川から流出してくる土砂などで湾奥から次第に汽水化していったようである。

この地域は関東地方でも比較的古い時期から貝塚が形成され、縄文時代晩期に至るまで貝塚が存在したことを大きな特徴としている。土器片錘を出土する貝塚は、中期の貝塚に集中しているが、使用される土器片は、奥東京湾、東京湾東岸地域が加曽利E式土器を利用したものが主体を占めるのに対し、この地域は古いものは、五領ケ台式土器を利用しており、主体を占めるのは阿玉台式土器を利用したものである。この地域の中期の貝塚を形成していた貝類は、ハマグリを主

体とし、アサリ、シオフキなどの内湾砂底性の貝が多くみられるものの、チョウセンハマグリも僅かながら含まれるようになる。捕獲対象となる魚は、スズキ、クロダイなどの内湾性の魚類が中心だが、マダイやマアジなど外洋性のものや、コイなどの淡水魚も含まれる。

沼南町布瀬貝塚

縄文時代中期、阿玉台式期に主に形成された貝塚。魚類は10種類同定されている。クロダイ、スズキ、ボラなどの沿岸性の魚が主体であるが、その占める割合には大きな差はない。

土器片錘は156個出土した。阿玉台式土器を利用したものが大半を占めている。他の漁撈具は釣針が1個出土している。

この地域では布瀬貝塚の他に、小見川町木の内明神貝塚でも五領ケ台式期から加曽利E式期の土器片を使い140あまりの土器片錘が出土しているが、魚骨の層位等が不明のため布瀬貝塚を例とした。

4) 九十九里地域

現在の銚子市から長生郡一宮町にかけての太平洋に面した海岸地域である。現在は九十九里平野が広がっているが、縄文海進当時はかなり内陸部まで海水が入り込んでおり、広い内湾を形成していた。そして一部内湾部の湾口に砂洲が発達し、この湾内はラグーン化し、後に泥炭地化する。縄文時代後期になると海退化が進み、湾内に砂堤が形成され、湾内の広い地域がラグーン化する。この砂堤が外側に広がることによって、九十九里平野は形成されていったようである。

土器片錘を出土する遺跡は少なく、出土量も数個単位である。この大きな理由として、この地域はまだ未調査の遺跡を多く残していることがあげられ、今後に期待したい。

5) 南房総地域

木更津市、長生郡一宮町以南の全域である。下総台地の南端から南へ丘陵地帯が続き、富津市を境としてその丘陵地帯が海岸線にせまるようになる。海の様子も砂泥から岩礁へと変化する。貝塚の数は少なく規模も小さい。土器片錘を出土する貝塚は縄文時代中期から後期にかけて形成されたものに集中する。貝塚を形成している貝類は、ハマグリ、アサリなどの内湾砂底性のものから、レイシ、サザエなど岩礁性のものも含まれるようになる。捕獲対象になった魚も、房総半島を南下するにしたがって沿岸性のスズキ、クロダイに変わり、外洋性のマダイが主体を占めるようになり、外洋性の回游魚なども含め魚種が増加する。

木更津市祇園貝塚

縄文時代後期堀之内式期を主体とする貝塚。魚類は、13種同定されている。沿岸性・砂泥性の魚類が多くみられ、なかでもクロダイが圧倒的に多い。外洋性の回游魚としてカタクチイワシがみられる。

土器片錘は36個出土している。土器片錘の他の漁撈具として、釣針6個、ヤス等も出土した。

富津市富士見台貝塚

縄文時代加曽利B式期に主に形成された貝塚。地形的には東京湾岸のほぼ中央部にあたり、丘陵部が海岸線にせまるようになる変換点に位置する。捕獲対象となる魚は15種あり、内湾部で主体を占めていた、クロダイ、スズキに変わり、外洋性の魚であるマダイが主体を占めるようになる。岩礁魚であるイシダイもみられる。大型の外洋性回游魚は多くないが、マイワシやカタクチイワシなどの小魚がみられる。

土器片錘は13個出土しており、その他の漁撈具として釣針7個、刺突具15個があげられる。

館山市鉈切洞窟遺跡

縄文時代後期に形成された貝塚。房総半島南端の館山湾にのぞむ海蝕洞窟に位置している。捕獲対象となった魚は、称名寺Ⅱ式、堀之内Ⅰ式期のもので48種を数える。マダイが50%近くを占めており、その他は岩礁性、外洋性のものが多い。カタクチイワシやマイワシなどの外洋性の小魚も多くみられる。

土器片錘は20個前後出土している。その他の漁撈具として、釣針20個、刺突具20個前後が出土する。

Ⅳ　まとめとこれからの課題

以上のように房総地域における土器片錘を出土する貝塚遺跡と、捕獲対象となった魚をあげてみた。これをみるかぎり、土器片錘を漁網錘とするならば、縄文時代のこの地方における網漁法は、東京湾東岸域を中心として、奥東京湾、古鬼怒湾地域で比較的さかんに行われていたであろうと思われる。九十九里地域や南房総地域は調査されている遺跡数が少なく、調査の増加にともない、新しいデータが期待される。

土器片錘の在り方ということで、土器片錘と漁撈の関わりを、捕獲対象や自然条件で明らかにしようと試みたが、逆に次のような疑問点が残された。

1. 土器片所属時期と漁撈活動盛行時期の不一致
2. 地域、時期における土器片錘の出土量の差
3. 土器片錘と他の漁撈具との関わり方
4. 貝塚をともなわない遺跡から出土する土器片錘についての考え方

房総半島は、「貝塚文化」で総称される、縄文時代中・後期の貝塚が発達し、当時の生活の形跡が数多く残されている地域である。多くの遺跡や遺物は、この地域において、内湾性の漁撈活動が活発に行われていたことを物語っている。土器片錘を漁網の錘具と考えるならば、以上にあげた4項目は、房総地域における土器片錘と、内湾漁撈の一形態とされる網漁法の在り方をもう一度みなおす材料となるものであろう。

縄文時代中・後期は内湾性の漁業が発達したといわれるが、その内容は網を使用して漁が行われたとされるだけで、網漁の様子はいまひとつはっきりしていない。また、房総半島でも、

その時期、地域によってその漁の形態なども違っていたことが遺物等から推測され、今後は地域ごとに、錘具からその網漁業の姿を推測したいと思う。

総じて、まとまりのない文章になってしまい、あらためて勉強不足を感じる次第であるが、最後に、多くの御指導をいただいた、金子浩昌、丹羽百合子の両氏に、記して感謝の意を申し上げる次第である。

（千葉市立加曽利貝塚博物館）

〔引用・参考文献〕

C千葉県教育委員会　「祇園貝塚」　『千葉県文化財調査抄報』第４集　1970
『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告』　1983
E江坂輝弥　「生活の舞台」　『日本の考古学Ⅱ』　河出書房　1965
『化石の知識』　東京美術　1983
F船橋市教育委員会　『高根木戸』　1971
G後藤和民・庄司克・後藤美智子　「昭和45・46年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」
『貝塚博物館紀要』6　千葉市加曽利貝塚博物館　1981
後藤和民・庄司克　「昭和47年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」　『貝塚博物館紀要』
7　千葉市加曽利貝塚博物館　1981
後藤和民・庄司克・飯塚博和　「昭和48年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」　『貝塚博物館紀要』8　千葉市加曽利貝塚博物館　1982
K金子浩昌他　『鉈切洞窟の考古学的調査』　千葉県教育委員会　1958
金子浩昌　「布瀬貝塚」　『印旛手賀・印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』　千葉県教育委員会　1961
「富士見台（犬吠）貝塚」　『古代』42・43合併号　早稲田大学考古学会　1964
「貝塚と食料資源」　『日本の考古学Ⅱ』　河出書房　1965
「現利根川下流域の縄文貝塚にみる石器時代漁撈の諸問題」　『九学会連合利根川流域調査委員会、利根川－自然・文化・社会－』　弘文堂　1971
金子浩昌編　『貝塚出土の動物遺体』　貝塚博物館研究資料第３集　千葉市加曽利貝塚博物館　1982
金子裕之　「特殊な木漆器－愛媛県船ケ谷遺跡の場合」　『月刊文化財』218号　1981
加曽利貝塚調査団編　『加曽利貝塚Ⅱ』　千葉市加曽利貝塚博物館　1968
『加曽利貝塚Ⅲ』　千葉市加曽利貝塚博物館　1970
加藤晋平・小林達雄・藤本強編　『縄文文化の研究２　生業』　雄山閣　1983
『縄文文化の研究７　道具と技術』　雄山閣　1983
上総国分寺台遺跡調査団編　『西広貝塚』　早稲田大学出版部　1977

Kishinove.K 「Prehistoric Fishing in Japan」 Journal of College Agriculture Imperial University of Tokyo Vol.11 №7 1911

小宮孟・関口達彦・沢野弘 「自然科学の手法による遺跡・遺物の研究４―古環境の復原―」『千葉県文化財センター研究紀要』9 千葉県文化財センター 1985

楠本政助 「仙台湾における先史狩猟文化」 『矢本町史』第１巻 1973

『縄文生活の再現』 筑摩書房 1980

M松戸市教育委員会 『貝の花貝塚』 1973

Morse, E. S 「Shell mounds of Omori」 Memoirs of the Science Department University of Tokyo Vol. 1 part 1 1879

港区伊皿子貝塚遺跡調査会 『伊皿子貝塚』本文編 1981

N直良信夫 「漁網に関する一考察」 『史観』 Vol.32 1946

西村正衛 「利根川下流域における縄文文化編年的研究の概要」 『九学会連合利根川流域調査委員会，利根川－自然・文化・社会－』 弘文堂 1971

野口行雄 「房総半島における縄文時代生産活動の様相」 『千葉県文化財センター研究紀要』9 千葉県文化財センター 1985

O岡本勇 「労働用具」 『日本の考古学Ⅱ』 河出書房 1965

大山柏・池上啓介・大給尹 「千葉県一宮町貝殻塚貝塚調査報告」 『史前学雑誌』9－5 1937

S酒詰仲男 『日本貝塚地名表』 土曜会 1958

『日本縄文石器時代食料総説』 土曜会 1960

鈴木公雄 「縄文時代」 『八日市場市史』上巻 八日市場市史編纂委員会 1981

T滝口宏編 『加曽利貝塚Ⅳ』 千葉市加曽利貝塚博物館 1971

武田宗久編 『加曽利貝塚Ⅰ』 千葉市加曽利貝塚博物館 1968

対島郁夫 「千葉県木更津市祇園深作貝塚」 『日本考古学年報』9 日本考古学協会編纂 1961

W渡辺誠 『縄文時代の漁業』 雄山閣 1973

『縄文時代の知識』 東京美術 1983